



人魚のこと

人魚が来たのは、台風の前夜だった。

夏に何度も発生した台風がまた来るとテレビで知って、水野美波<sup>みなみ</sup>は家中の雨戸を閉めにまわった。高度経済成長期に山の中腹にある畑をつぶして建てられた美波の家は、住人と同じく、あちこちにガタがきている。年に数回だけ手をかけられる雨戸は、軋みながら家を閉ざしていく。

二階建て、屋根付きガレージ付き、庭付き、一戸建て。四人で暮らしていた時にも狭いと思ったことは一度もない。一人で暮らす今では部屋の多さが足腰にこたえる。父も母も晩年は寝室を一階に移していた。美波はまだそこまで不自由を感じていないが、いずれ考えなくてはなるまい。ただその時に、物もあまり持たない美波はこの大きな家に住む必要があるのだろうか。考えていると、頭の中に靄がかかったようになる。かぶりを振ると勝手口からガレージに出る。コンクリート製の頑丈な屋根に雨が叩きつける音が大きく響き、家の前の坂道を、雨が土を含んで色を変えながら川

のように流れていった。シャッターを下ろそうとスイッチに手を伸ばすと、坂の下から見慣れた桃色の軽自動車が登場してくる。ガレージの前で止まると、助手席の窓が開き、まつきなぎさ 姪の松木渚が運転席から体を乗り出した。

「車入れたらすぐに閉めて」

ボタンを押すとシャッターはウォンウォンと音を鳴らしながら雨と風景を閉ざしてゆく。シャッターが床にがしやりと落ちてロックがかかるのと、電気がつくのは同時だ。そういう設定になっている。パパはこういうところにこだわってたな、と美波は思い出す。

渚は運転席から出ると扉を全部開けた。大きなブルーシートの包みが、後部座席いっぱいに寝かせてある。

「おばちゃん、そっち持って」

美波は言われた通りに渚と反対側に立ち、ブルーシートの端を両腕で抱える。その触感から中身は半流動体のように思われた。動かすたびに、たぶん、たぶん、と、丁度凝固直前のプリンが波打

つような音がブルーシート越しに美波の手のひらに伝わる。かがんだ渚のブラウスは第二ボタンまで開かれ、白く肉付きのよい胸が鎖骨の下に影を作っている。いつもブラウスのボタンをきちんと留める姪は婚約者と一緒に暮らしているのだと不意に生々しく思い起こす。

ブルーシートをどうにか車から出し、コンクリートで固められた下に置くと、渚は膝をついてブルーシートをゆっくりと開けながら呼びかけ始めた。

「にんぎょお。にんぎょお、大丈夫だよね、死んでないよね、にんぎょお」

それが「人形」ではなく「人魚」だとわかったのは、ブルーシートが最後まで開かれたときだった。

——人魚と言っても、アンデルセン絵本に描かれるような、上体が美女で下肢が魚のそれではない。溶けかけの寒天ゼリーのように透明で、人というよりは、昔生物の教科書で見た発生まもない胎児に似ていた。頭が大きく、背中が丸く、「横向き」になっており、手は短く、足は腫れぼったく未分化で尾びれのように見える。色もなく、臓器と思しき内容物が透けて見えるが、それらの色素

も薄い。

「人魚なの？」

美波は取り乱している姪に尋ねる。渚はしばらく「人魚、人魚」と呼んでいたが、その寒天の唇のような穴が小さく震えてどうやら空気の運動があるらしいことを確認すると、大きく息を吐いて「生きてる」とガレージに横たわった。

「シャワー浴びてきたら」

美波はおばとして姪の健康をまずは案じる。渚は雨と涙に溶けたアイラインで大きくなった目で美波を見てから、眉間にしわをよせて泣きそうな顔をして、「人魚」を見る。

「溶けないように見てたらいい？」

渚は大きく頷き「乾けば大丈夫だと思うから」と言う。と勝手口から家に入って行った。

ブルーシートの中の寒天ないしは人魚と「二人きり」となった美波は、ガレージの奥から数年ぶりにキャンピングテーブルと椅子を取り出して埃を払う。数年ぶりに舞っただろう埃は空を泳いで、

ブルーシートの上に落ちる。渚に怒られると咄嗟に考えてウェットティッシュを手にもったままブルーシートを覗き込んだ。——なるほど、先ほどより「凝固」が進んだと見える。色も濃くなっていた。そのあたかも肌を模したような薄桃色の表皮に乗った綿ぼこりに手を伸ばし、弾力のあるそれに触れる。パチツと静電気が走った。電気は指から肘まで通り抜け、急に頭が軽くなったような感覚になる。

よく見れば、寒天の中には無数の光が走っている。それは電気によく似ている。

「ごめんなさい、驚きましたか」

美波はもともと小さな声をもっと小さくして話しかけてみる。

「あなたが誰かわかりませんが、渚が大事にしてるみたいだから、私も大事にしますね」

固まりきらないらしい腋のあたりがチカチカと青白く光る。

「でももしあなたが悪いものだったら、とかしちやいますよ」

また腋がチカチカと光る。

「聞こえているんですか」

何度か話しかけるうちに美波は、チカチカと光るものがこちらの声に呼応しているのだと気がついた。寒天でできたロボットとも見えた。渚も秀介くんも文系だけど、生体ロボットを作るお友達が会社にでもいるのかしらんと、のんきに考えた。

「聞こえているなら教えてください」

人差し指でそっと人魚の光る腋に触れる。ピリツと小さい電流を感じる。

「ここは耳ではありません」

誘導するように、人差し指を這わせる。白い光がそれについてゆく。肩を通過して、首へ、顔の横へ。顔には先ほどまでなかった目鼻が生まれている。目にはまだ眼球がないようだが、鼻にあたる突起には小さな穴がひとつできていた。

「耳はここです。このあたり」

チカチカチカと電気は瞬いた。顔の横あたりの寒天がずるりと垂れる。美波は固唾を飲んだ。青

白い電気は寒天の中をせわしなく移動して、美波の近くに集まる。美波は耳にかかっていた髪をかきあげると「これです」と教える。また眩しくチカチカチカと光り、寒天は耳を作り出した。

ひとまず渚が心配していたように溶けることはなさそうだった。美波は立ち上がり、お茶の準備をする。家族でキャンプに行かなくなってからは、このガレージで母とお茶を飲みながら洗車する父を見ていた。母が病で他界してから父があとを追うまでの短い期間も、美波はここで一人でお茶を入れて車を手入れするのを見ていた。

電気ケトルでお湯を沸かす間にブルーシートを覗いて、美波はぎよつとした。寒天はずいぶんヒトに近づいているが、そのヒトがまずい。目元にはカラスの足跡、頬はこけ落ちて口元は皺をたたえて下がっている。一重まぶたに糸のように細い目。先日五十三歳を迎えた美波そのものである。

「その顔はダメです」

いつの間にやらできたらしい眼球がぐるぐると動く。

「場所は合っているけど、どうせ真似するなら、もっと若くてきれいな子にしなさい」



それから首から下にも服を着ていることに気がつき、驚いてから、その服は布ではなく、寒天が変容したものらしいと気がついてまた驚く。もう何年も捨てそびれているTシャツの、首元が縊れているところまで再現されていた。

「やめてください、そうではありません、それは体ではありません。それは服です。服というのは、えーと、服です」

Tシャツを脱いで裸を見せてあげようか、と考えて、そうするとこの寒天状の生き物は五十代の女の体をコピーするのだろうと予測されて、気が咎める。

「ちよつと待っていてください」

美波がインターネットでポルノ女優の全裸姿を探しプリントアウトする間に渚はシャワーを終えたと見えて、ガレージに戻ったときには全裸の渚が二人いた。一人はまだふるんふるんしていた。

「何も聞かないで、しばらく私たちを置いて欲しい」

夜の間にごんにやく程度には固まった渚もどきと美波を置いて渚は早朝に出勤した。

聞くなと言われたら尋ねないことは美波には容易かった。察して聞き出すことを求められるほうが苦痛だった。週に三回のアルバイトもできるだけ人と話さないで済む職種を選んだ。両親が亡くなった今、近隣の住人とも無接触ではいられないのだが、どうにか会釈と軽い挨拶だけでやりすごしている。

ガレージでどうにか椅子にさせられた人魚は、体のあちこちを痙攣させるように動かす。最初は驚いたが、それが動き方を探っている様子だとわかってからは見守ることにした。

美波は自分のためにコーヒーとトーストを、念のために水を用意して人魚の向かいに座った。朝のうちにかろうじてワンピースを上から着せることができた。服を着せてみると、渚に似てはいる

が、表情のころころ変わる渚と比べれば、目も口元もほとんど動かず、少し渚に似ているだけの人形に見える。人間味というのは、表情や動作に宿るものなのだろうかと美波は思う。既に肌はしっかりと色がついているのに、惹きつけるような透明感があり、それもまた人間から遠く思われた。

髪も整えず寝間着のまま美波はもそもそとトーストをかじる。あまり食に関心がない。ふと、人魚を見ると、黒目がぎよろりと動いて美波を向き、チカチカと瞳の奥が光を発した。

「それは目です」

美波は小さな声で言った。昨夜の様子を思い出せば、何かを模倣したり学習する際に人魚は発光するようだった。

人魚は自由に動かせるのは黒目だけのようで、首が動かず、顔は斜めを向いているのに瞳だけが美波を見るというのは、異様である。人魚の目は美波の手元と口元を追うようだった。

「食べたいですか」

尋ねてみるが、意が伝わらないのか特に反応がない。「会話」が成立するときとしないときがある

ようだ。

「私は今、食事…えーと…ごはん…栄養。栄養を摂っています」

栄養というにはいささか偏っているな、とすぐさま考えたが、人魚に伝えることでもない。

「これはパンです。パン…えーと…小麦…栄養です」

人魚の目がチカチカと光った。

「食べたいですか」

もう一度尋ねると、また人魚の目がチカチカ動き、唇が小さく震えた。耳鳴りに似た音がする。

美波は立ち上がると、トーストを米粒ほどにちぎり、人魚の口元に持って行く。人魚はぎこちなく首を動かし、小さな口を大きくする。それは筋肉で動かすのではなく、円の径が突然変わるというのが近く、人魚はまだ人体の動きを把握しきっていないようだった。

金魚のように口をあけている人魚の口を覗き込むと歯がない。美波は思案して、自分の口を開けて歯をむき出しにする。人魚の口元がチカチカと派手に光り出すが、歯が生える気配がない。ふと

思いついて水を少し流し込んでみる。すると途端に歯が生える。水でふやかさないで形を変えられないようだった。美波は人魚にパンを与えることを諦め、歯をむきだしにしたまま、目の前で咀嚼してみせる。人魚の目がチカチカと光る。

昼になっても人魚は椅子から立ち上がれないままだったが、歯は固まり、顎を動かせるようになっていた。美波はシラスを一匹、人魚の口に流し込んでみる。人魚は歯をむきだしにしてかみくだく。その様子に違和感を覚えていたが、舌がないのだと気がついた。

「人間は、べろがあります」

そう言って舌を出す。人魚の目がまたもチカチカと輝く。その輝きに、小学生の頃、父と母と姉と四人で行ったキャンプを思い出す。テントの中から空を見上げると、姉の真砂が星座を教えられた。

(アンドロメダ。カシオペヤ。ペガサス。北極星。北極星はいつでも出てくるから、迷った時は北極星を探すんだよ)

その数年後、家から出られなくなった美波は空を見ることも星を探すこともなくなったけれど。

夜も更け、渚が大きな荷物を車にたくさん積んでガレージに入ってきたときには、人魚もぎこちなく歩くようになっていた。

その日はいろんなことが気になって、渚は仕事に集中できなかつた。と言っても、地域限定社員という名目で就職して七年、異動もなければ後輩が入ってくることもない。よほどのトラブルが起きなければ半分眠りながらも渚は仕事ができただ。男性社員から流れてきた書類に目を通し、不備を顧客に電話で確認し、フォームに入力し、原本は本社に発送する。小さな営業所なので同僚もない。女性の先輩がいるが、彼女は総合職なので本社と営業所を行ったり来たりしている。

その日は先輩が営業所に出勤する日で、朝から賑やかだった。腰の曲線をくつきりと描くタイトなスーツを上品に着こなし、手首には細身の腕時計がおさまっている。先日から営業所内で騒いでいたプレゼンがあるらしく、朝からプリンターがガコンガコンと資料を製本していた。渚は先輩に挨拶するとパソコンの電源を入れる。

「松木ちゃんおはよ。昨日はデータ送ってくれてありがとね」

先輩はベージュに近い赤でかたどった唇を横に広げて笑顔を見せる。渚は意識して口の端をくぼませる。

「ルーティンワークで作ってるデータですから」

「そのルーティンが、私は向いてないのよね。この案件とれたらおごるからね」

プリントしたばかりの資料を手早くファイルに入れるとノートパソコンを閉じる。すでに待機していた所長と課長が「タクシー来てるぞ」と手招きをし、先輩は駆け足で出てゆく。しばらくすると長電話をしていた男性社員が封筒を渚に手渡し、「これ発送しといて」と言い置いて出てゆく。営業所が渚一人になると、たちまち昨夜のことが思い出された。人魚のこと。森岡のこと。あの若い女のこと。秀介のこと。

コンビニで買ったうどんを食べ終わると、秀介にどう説明しようかと頭がいつぱいになる。ゴミを捨ててトイレに立ち寄りメールを作る。

「しばらく距離を置きますか」



距離を置くということが、どういう意味を持つことになるのか、について、深く考える余裕は渚にはなかった。とにかく秀介に会うのが怖い。そのメールを送信できないまま席に戻ると、電話が鳴り出し、にわかには忙しくなった。

駅に駐車していた車でマンションに帰れば、部屋の電気が点いていた。秀介がもう帰っているのだ。渚は身構える。

「ただいま」

平静を装い家に入ると、秀介は四人掛けのダイニングテーブルでパソコンと図面を広げて携帯電話で話している最中だった。

「子供部屋の仕切ですか、そうですね、もうお一人ってことだって…えっそうですか、おめでとうございます、もう絶対いいおうちにしますよ、えっ、私は」

秀介が今気づいたかのように渚を見る。

「ただいま」

奥歯のほうに力を込めて頬を持ち上げる。秀介はすぐに電話に顔を戻す。

「ですね…それで仕切つけるとですね、お値段のほうも」

乾いたような笑い声を立てる。こんなに普通の営業マンみたいなことをするんだなと渚は感心した。

ダイニングを抜けて寝室に向かう。ベッドに目を向ける。二人サイズのベッドには、一人だけが寝た形跡しかない。サイドテーブルには大学の頃に二人で行ったアメリカで撮った写真が飾ってある。そこから大きな旅行をしていないので写真は更新されない。ベランダには秀介が干したらしいカッターと下着が出ている。ここで暮らし始めたときには観葉植物を飾ったりもしたが、流産や祖父の葬式で慌ただしく、すぐに枯らしてしまった。

(もう私、帰ってこないだろうか)

そう考えた途端、涙が溢れた。

(もう私、帰る資格なんてないじゃない)

クローゼットを勢いよく開けるとスーツケースに必要な服を詰める。最低一ヶ月着回せる服、人魚に着せやすそうなワンピース、下着は全部、化粧水、乳液、美容液、保湿クリーム、下地、パウダー、鏡、ドライヤー、昔秀介とお揃いで買ったパジャマ。物音に驚いたのか、秀介が早々に電話を終えて部屋にかけつける。先ほどまでの仰々しいほどのつくり笑いの顔は電話に閉じ込めてきたのか、いつものとおりの、感情のつかめない表情をしている。

「旅行？」

ぼそりと尋ねるが渚は答えない。荷造りを続ける。秀介は壁に立てかけられた箒のように、壁にもたれたまま渚の動きをずっと見つめる。渚はスーツケースとボストンバッグとリュックサックに荷物を詰め込むと両手に抱える。よろけたところを秀介が駆けつけて腰に手を添える。そのままボストンバッグを持つ。

渚は何も言わずにいつも履いているヒールを履く。履いてから、靴も複数必要だと気がつく、人魚が履きやすいようにスニーカーとサンダルも入れなくてはいけない。渚の手を助けるように、秀

介は靴箱の脇に置いてある紙袋を広げてサンダルとスニーカーを入れる。盗むような上目遣いで秀介を見るが、いつもと変わらない顔をしている。あまり話さないのもいつもと同じだ。

結局車の後部座席に詰めるのを手伝ってもらった。そこでようやく渚はしゃくり上げるように泣きだして

「しばらくおばちゃんのところにいるから、また連絡するから、ごめん」

秀介が運転席に入ろうとするのを制して渚は車に乗り込む。しばらく走らせると携帯電話にメッセージが届いた。信号待ちの間に確認すると森岡からだった。

「ぼくの人魚、いつ返してくれる？」

人魚を迎えて初めての土曜日は、朝からよく晴れた。三人分の布団を干していると花火の音がして、住宅街の向こうから薄紫の煙がのぼった。雑草が生い茂る畑を挟んだ隣家から騒々しい声が聞こえて、はじかれるように半袖体操服と長ズボンジャージに身を包んだ少年が出てきた。

少年はジャージと同じ色のナップサックを肩にかつぐと、大股で庭を突っ切り、ブロック塀を登ると荒れ放題の畑に着地する。上から眺めていた美波に気がつく、目の上まで伸びた髪の毛を揺らして肩をすくませる。美波は昨日人魚と一緒に練習したように、耳元から頬肉を持ち上げるように意識してみる。今まで知らないでいたが、頬を持ち上げようとすると目尻も自然に下がるのだ。少年はすくませた肩をおろすと、舌を出して頭を少しだけ下げ、草むらの中を走りだした。

キッチンに戻ると、挽きたてのコーヒーの香りがした。山側の窓を網戸だけにして、渚と人魚が朝食を摂っている。人魚の容姿はまだ渚に似ているが、テレビや写真を見せているうちに「渚に似

ている別の人」程度になってきた。

「運動会どこ？」

渚が美波にサラダを取り分けて尋ねる。

「中学校。隣の子が走って行ったよ」

舌を出して頭を下げた様子を思い出すと、自然とあの時の笑顔が再現できる気がした。

「あの子、中学生なんだね。小学生くらいかと思ってた」

また耳鳴りのような微かな音がする。この耳鳴りが人魚の声なのだろうと渚と二人で納得しあつたのは、木曜日のことだった。

「小学生。しょ・う・が・く・せ・い」

渚は手元に置いた分厚いメモ帳に漢字とカナを書きながら発音する。人魚も右手に握りしめたクレパスで大きめのスケッチブックに「小学生」と器用に書き取る。「形を模倣する」ことに非常に長けているようだった。渚は書きとられた字を見て「わあ、すごい」と拍手をし、目には涙まで浮か

ばせている。渚の大きな目やすっと通った高い鼻は父親の松木さん譲りだが、感動屋の性格は母親の真砂そっくりだった。

（わあ、すごい、美波ちゃん天才）

姉が喜ぶ顔が見たくて美波はたくさん勉強をしたはずなのだ。

「秀介さんから聞いたけど、渚、家にいるんだって？」

時候の挨拶から始まる礼儀正しいメールの中に、他の話題に織り交ぜて渚の所在を確認する一文が入っていた。渚のことを怒りもし案じもする母親らしい内容だった。

「いつもありがとう。渚は月曜から家にいます。仕事にも行っていきます。理由はまだ聞いていませんが、元気にしているので、安心してください」

便箋にしたら三枚にはなりそうな真砂からのメールに、美波はいつも二行くらいで返事をする。言いたいことを伝えようとすると、頭の中でたくさん言葉が風の中の羽虫のようにとびかかって、美波は昔からそれらをつかまえることもまとめることもできないのだ。だから、あんなに勉強した

のに、中学校に入る頃には成績は下から数えたほうが早かった。

もし自分が姉のように気の利いた会話ができたならば、数日前から居座っている姪に理由を尋ねることもできるかもしれないが、それをしようと思うと美波の頭には羽虫がわーっと飛び交うのだった。

「ねえ、おばちゃん。私、名前、考えてみたんだ」

小学生の頃、ハムスターの名前考えたから好きなを選んで、と言ってきたのと同じ表情で、渚がリストを差し出した。うみ、ありえ、まりん、はま、まな…と女の子の名前が並ぶ。

美波は不安になる。渚は人魚をいつまでこの家に置くつもりだろうか。この正体不明の生き物を、ペットのよう、あるいは子供のよう、あるいは子供のように思っていないだろうか。

それよりも、と思つて美波は渚に

「おばちゃんは、まーちゃんと呼んでるよ」

と伝える。渚は大きな目をますます大きくした。



「いつから？」

「火曜日くらいから」

「もしかして、マーメイドだから『まーちゃん』？」

目を大きくしたまま口元を固くした渚をみて、悪い事をしたかもしれないと美波ははっとした。

「おばちゃん、安直すぎる」

肩をガツクリ落としたものの、名前がないことを不便に感じた美波が便宜上つけたのだろうとすぐ思い当たった。それは自分の奥に淀む感情とは遠いもののような気もした。

当の人魚を見ると、廊下を壁伝いに歩く練習を続けている。昨日よりも一昨日よりも、背中がしつかりしたようだ。「正しいウォーキング方法」という動画を見せたのがよかったかもしれない。壁に手をついたまま立ち止まり、足の指をひとつずつ持ち上げては床につけ、その感触を確かめている。

「まーちゃん」

美波に教えられた名前を呼ぶと、黒い目がキラッと輝いた。

「まーちゃん？」

もう一度呼んでみると、壁につけていた手を離し、人差し指以外の指をゆっくりと内向きに曲げると、「ゆびさし」の形で人魚自身の顔をさす。そのためらいと思索を含んだゆったりとした仕草は渚の胸を打った。

「うん、そうだよ、まーちゃんはあるただよ。あなたはまーちゃんだからね」

渚はかけよって、人魚を抱擁した。

人魚の成長はすさまじく、月曜日の夜にはDVDを自分で観れるようになっていた。

「まーちゃん、すごい！覚えるのが早い。かぐや姫みたい」

そう言って渚はすぐに悲しそうな顔をした。たった三ヶ月で適齢期に成長したかぐや姫であれば、もうすぐ月に帰ってしまう。

「まーちゃんは月から来たの？」

冗談めかして美波が尋ねると、人魚は一体いつ覚えたのか、いたずらっぽい表情をして笑う。美波の言葉を理解しているのか理解していないのかわからないが、肯定でも否定でもない人魚の反応に渚はもつと悲しくなる。

美波は渚を慰める適当な言葉がわからなくて、

「まーちゃんはかぐや姫じゃなくて人魚姫だよ」

と言ったが、アンデルセン童話の人魚姫であれば最後は海の泡となってしまふのだ。美波はふと、中学校の頃に読んだ本を思い出す。

「日本にも人魚の話があった気がする。調べてみるね」

翌日はアルバイトの日だった。渚と約束した伝承をインターネットで調べてから家を出る。内容は渚を喜ばせるものではなかったが、気晴らしにはなるかなと考えた。

アルバイト先の主任に珍しく褒められて、美波は鼻の穴をふくらませて帰路につく。

（「動きがきびきびしてきたね」だって）

部活帰りの高校生でごった返すバスも今日は気にならなかった。

（二年、がんばってきてよかったな）

バスを降りて街灯のない畦道を歩いていくと、自宅の前に人影が見えた。その影はベランダを眺めているように見えた。あの人影が人魚を不審に思うものかもしれないと思うと、美波の小さな頭は真っ白になった。全身をこわばらせ、カバンの中の折り畳み傘の柄を伸ばして万一に備える。万

一がどういう時なのか美波は深く考えられなかったが、背筋が伸びて、ぐっと腹に力が入った。

一歩近づく。

また一歩。

もう一歩と繰り返していくうちに、影のほうがちらに気がついた。背丈は美波より頭一つほど小さく、白い半袖のカッターシャツに黒い学生ズボンをはいている——隣家の息子だ。少年は目が悪いのか、暗がりで見野が悪かったためか、眉間にしわを寄せ目を細くして美波を見とめると、何か言いかけてやめた。そのまま踵を返して、また雑草の中を走りブロック塀を越えて家に帰って行った。

美波の胸には人影の正体が隣家の少年だったという安堵と、同時に人魚のことをどう説明するかという不安が湧いた。慌てて玄関を開けて部屋に入ると男の笑い声が聞こえる。美波は靴を片方脱いだまま動けなくなった。

「まーちゃん」

かろうじて声を出す。男の声はまだ聞こえてきた。それは成人した男の声に違いなかったが、人を嘲るような響きがあり、卑猥な単語が混じっていた。血の気が引いたが、その言葉が決定的に乱暴さを持っていると気がついた瞬間、美波は片方の靴を脱ぐことも忘れて家にあがった。

「まーちゃん、まーちゃん？」

できるだけ大きな声で呼ぶ。美波は人魚に緊急を伝える方法を教えるべきだったと後悔した。

家中を探し回って、ベランダに続く二階の収納部屋でようやく人魚を見つけた。人魚は一人で寝そべって、白い遮光カーテンに映し出された映像を見ている。それは丁度、男女が交わりあう場面だった。慌てて美波が呼びかけると、首を傾げるようにして振り返り、にっこり笑う。同時に映像も上の方に移動する。映像の出処は人魚の額のようにだった。人魚はまたカーテンのほうを向くと、映像を逆戻しした。美波は人魚の隣に寝そべって映像を見始めた。



最初は暗い闇がある。次第に色と光が生まれ、画面のあちこちがチカチカ光る。

ぼんやりした影があらわれ、チカチカ光ると輪郭を明確にしていく。画面に現れたのは、男の顔だった。目元の下がった、二重まぶたの顔立ちの整った男だ。その男が少しずつ遠ざかり、服を着ていない全身があらわになる。音声は途切れ途切れだったが、己の下半身と画面——つまりカメラの方を交互に指して、歯をむきだしにして笑っている。

男の背後から若い女が姿をあらわす。やはり服は着ていない。濃いめのメイクで随分顔を作っているが、あどけなさが残る。男は三十代に見えたが、女は二十歳を少し超えたくらいだろう。男はカメラの前で女にいろいろな格好をさせる。体の様々な部位をカメラに向ける。そうするうちに女は男に絡め取られ、そこから先が最初に美波が見た映像だった。

人魚は額の一点から映像を映し出しながら、目をチカチカと輝かせている。それは人魚が学習す



る時に見られる習性だ。

「これは繁殖活動です」

小さな声で美波が言うと、また目がチカチカと瞬き、耳鳴りを起こした。

やがて男は女から離れてカメラに近づいてくる。画面は暗くなり、また男の体が見え、暗くなり、と繰り返す。男のオットセイのような声が続く。けたたましく笑う女の声も入る。しばらくして男は、自分の下半身についたどろりとした寒天状の物体を女に舐めさせる。寒天は赤や青にチカチカと光っている。女は小さな悲鳴に似た声をあげながら、夢中になって貪る——その寒天には見覚えがある。美波はようやく、このカメラは人魚自身なのだと気がついた。

その悪夢のような運動が突然に止まる。男と女は同じ方向を見る。知った声が聞こえ、男が言い訳を始める。女がきよろきよろ見回して男をなじる。甲高い声で女が責める中、男は立ち上がり、新しい人物の手を引くと、ストライプのブラウスに手をかける。それを両手で制すると、渚ははつきりと人魚を見て「ひっ」と悲鳴をあげた。

「気持ち悪いだろ、こいつ。見たまんまコピーするの。ねえ、ぼく、渚ちゃんが、」また男の手が渚の胸元に伸びた。ボタンが一つ外れる。

「きいくん、そんなおばさん構わないでよ」

女が高い声で非難するが男は耳を貸さず「ねえ渚ちゃんも、これに」と渚の抵抗を無視してまたボタンを外す。渚を救ったのは、奇しくもその女だった。自分を見ようとしないうちに業を煮やしたのか、鍋いっぱいの水を男と渚に頭から被せる。同時に映像が乱れ、闇に戻った。

美波は思慮もなく男に怒りを覚えた。頭の中にひどい言葉が浮かんだ。唇をぎゅつと結んで噛み締める。人魚は映像を収束させたあと美波をじっと見ていたが、やがてぎこちなく抱きしめた。細やかな電気が美波の体でパチパチと弾けていく。全身から急に力が抜けて、美波はわんわん泣いた。

渚はその晩遅くに帰ってくると「まーちゃん、自分で二階にあがったの？すごい！」と跳ね上がって喜んだ。

「姪が婚約者以外の男と修羅場になっていた」

翌日は三ヶ月に一度の通院日だった。美波は昨日のことですっかり混乱してしまい担当医に相談しようか迷って、結局「最近はよく眠れています」とだけ話した。

家に帰ると、また隣家の少年がベランダを見つめていた。まだ明るかったので、美波は思い切つて「あの」と声を出した。少年はそのかすかな声に前髪を揺らして肩をあげる。美波を見ると耳たぶを赤くしてまた草むらを走り抜けて行った。

ベランダを見てぎょつとした。人魚が出て外を見ている。美波は慌てて家に入りベランダに出ると、人魚の隣に立った。

「まーちゃん」

耳鳴りが響いて、人魚が瞳をチカチカ輝かせている。人魚の目線にあわせれば、畑と、幹線道路

と、鉄道と、山と、鉄塔と、電線と、畑と、草むらと、森と、スーパーと、工場と、団地と、学校が見えた。美波は人魚をたしなめるのをやめて、指をさす。

「どうろ。くるま、自動車、早く移動できる、渚も乗っています」

渚、という響きに反応して、鳥のさえずりのような耳鳴りがした。慣れてくると、耳鳴りにも種類があることがわかってきた。

「山。畑…。畑は、野菜を作る場所です。あのおたくの畑は、まだ作っています。ここの畑は、もう休んでいます。スーパー、アルバイトの帰りに、ごは…栄養…ごはんを買ってくる場所です」

DVDやテレビで色々なものを見せていたが、外に出て実物を見るのは初めてなのかもしれない。美波が指をさして説明をするたびに、耳鳴りがいろいろな音にかわって、また、瞳だけでなく肌までが着彩を忘れたように時折チカチカと光るのだった。

草むらを挟んで、やや坂の下にあたる隣家の二階に明かりが灯った。いつもは閉じてあるカーテンが少しだけ開き、少年と目があう。少年はすぐにカーテンをしめる。さすがに美波は気がついた。

「まーちゃん、やっぱり、あんまり外に出るのやめよう」

もしかしたら、少年だけでなく、他の男も人魚を恋慕するかもしれない。人魚が見た目通り成人女性であれば問題ない。だが実態は、まだコミュニケーションに難のある正体不明の生き物だった。もしかしたら生き物ではない可能性すらあった。

人魚は、美波の様子から判断したのか、部屋の中に入る。端と端が大きくずれてたたまれた洗濯物が置かれており、どうやら人魚がたたんだものらしかった。美波が人魚と一緒に正座をして洗濯をたたみなおしていると、電話が鳴った。

手元の子機を取ると、珍しく秀介である。

「岡野です、ご無沙汰しています」

礼儀正しい挨拶は、相変わらずである。

「渚のことですけど」

世間話を挟むことなく本題に入る不器用さに、美波は親近感をもっていた。

「はい、先週からうちに来てますよ」

「何か、話したでしょうか。お義母さん…渚のお母さんから聞かれたかもしれません」

美波はどきんとした。渚は昨夜も今朝も何も言わなかった。昨日の人魚の映像を思い出せば、渚は何か重要な秘密があるように思われたが、それがどういうものかはまだわからないのだ。

「渚は何も言いません。元気にしています」

「そうですか」

それからしばらく沈黙があった。人魚が子機の充電器を触っている。人魚は人間と同じように食物も食べたが、電気を好むようだった。やはり海の生き物ではなく、ロボットなのかもしれない。

「元気ならいいんです。ありがとうございます」

沈黙のあとで、秀介はそう言って電話を切った。

洗濯をたたんでお風呂を沸かし、人魚には蒸しタオルを与えて表面を拭かせる。お風呂に入れば完全に溶けてしまうのだろうかとは想像に易い。人魚を構成する物質が何なのか、高校中退の美波

にはもちろんのこと、国文学を専攻した渚にもまったくわからなかった。

「もりおかさんなら」

晩御飯の後でビールを飲みながら渚が呟いた。

「もりおかさん？」

渚は美波の小さな声を聞かなかったふりをする。

「そういえば、おばちゃん、昨日言ってた人魚のお話わかった？」

美波はためらった。渚が期待しているのは、人魚が海に帰らないで、ともすれば人間に帰化する物語だろう。（お姉ちゃんならうまく話題を変えられるのに）美波は器用に話題を変えることができず、姪の問いかけをかわすこともできなかった。

「——ある時、海で人の顔をした魚が釣れる。通りかかったお坊さんが『この変わった魚を祀ったらいいいことあるよ』て言うのでお祀りしていたら、幼い娘がその魚を食べてしまう」

「食べる」

「食べた娘は見目麗しい不老不死の美女になるんだけど、周りは年を取って死んでいくから、最後は孤独になって、出家してどこかの洞窟にこもったっていう、悲しい話だった」

「そう、悲しいね」

渚は黙ってしまった。

森岡が来たのは、その次の週の金曜のことだった。



また台風が近づいていた。二階の雨戸を閉めていると隣家の少年と目があつたが、少年はすぐさま目を外した。どうやら美波の忠告も聞かず、人魚はたまに外に出ているようだった。

晩御飯の時間にも渚は帰ってこなかった。十時を過ぎて、雨が降り出す。最初は小降りだったが、十分もしないうちに大雨になった。人魚はこの十日ほどの間にまた成長し、スケッチブックに単語を書いて簡単な意思の疎通ができるようになってきた。

「なぎさ」

人魚が紫のクレヨンでスケッチブックに丁寧に字を書く。名前を書くようになったのは昨日だ。渚はまた感動して泣いていた。

「なぎさ くるま」

クレヨンを持つ人魚の右手がチカチカと光る。意識を集中すると、どうしても色素が薄れるよう

だった。

そこまで書くと、人魚はくるりと振り向いて、片足で何度も地面を叩く。ダン、ダン、ダンと床が鳴る。それは美波が「こわい」という言葉と一緒に教えた動きだった。

濡れた路面をタイヤが走る音がして、ガレージが開く。車が入るとすぐにガレージがしまる。勝手口からガレージに出ると、車から飛び出した渚が「おばちゃん、玄関の鍵閉めた？」と叫ぶ。その剣幕は人魚を連れてきた時と同じものだ。

「閉めたよ」

「人魚は？」

「居間で、」

みなまで聞かず、渚は家中の電気を消しながら居間へ向かう。またタイヤが路面を走る音がして、ガレージの前で止まる。チャイムが鳴る。美波は体を強張らせて、インターホンのモニターから相手を見る。そこには、整った顔立ちの男が雨に濡れたままいた。男はまたチャイムを押す。

ピンポーン。ピンポンピンポンピンポンピンポン。

美波が居間に向かうと、渚は人魚をタオルケットでくるんでいた。人魚は全身が肌を着色することを忘れてチカチカと赤く光った。

「出ちゃだめ」

渚が囁いた直後、大きな声で男が叫ぶ。

「渚ちゃんーん、松木渚ちゃんーん、いるんでしょー？水野さーん、松木渚ちゃん出してくださいよー」

表札を見て呼んだのだろう。男は水野が渚の母の旧姓だとは知らないようだ。

「出さないんですか？かくまうんですか？窃盗犯の松木渚さんを？泥棒の松木渚さんを？」

それから男は渚のことを女を卑下する言葉と並べて呼びたてる。タオルケット越しに人魚を抱きしめる渚の目が潤んでいる。

突然電話が鳴る。ディスプレイを見ると隣家の番号だった。他に民家の少ない土地とはいえ、あ

まり大きな声で叫ばれてはうるさいのだろう。美波は受話器を上げる。

「はい、水野」

「もしもし」と隣家の主人の声がした。

「おたく、大丈夫ですか。警察呼びますか」

電話口の主人はずいぶん鼻息が荒い。数年前に空き家に引っ越してきた一家で、父親の葬式には出してもらったが、回覧板を回す時しか接触する機会はなかった。

「おたく、女性だけでしょう。私と息子、今から出ていきますので。なんとか捕まえますけど、その後どうしますか、警察連れて行きますか」

「あの、」

もどかしい会話の間にも男は怒鳴り続け、やがて門柱を蹴る音がする。

「泥棒！泥棒！返せ！泥棒！」

「とにかく行きます」

そう言うと鼻息荒く隣家の主人は電話を切った。美波は階段を駆け上がると雨戸を開けてベランダに出る。雨が美波の全身を叩きつけ、あつという間にずぶ濡れになる。雨戸を開ける音で気づいたのか、男が下に姿を見せる。

「おばさん、渚ちゃんいるでしょ、人魚もいるでしょ、答えるよ」

雨で視界を遮られてはいるものの、それがあの映像の男だと美波は確信した。隣家から、傘もささずに中肉中背の男と小柄な少年が走って出てくる。男はよほど渚と人魚に執心しているのか、隣家の主人に肩をつかまれるまで渚と美波を罵り続けた。

「お前は何だ！水野さんに何の恨みがある！警察を呼ぶぞ！」

抵抗しもはや言葉とも言えないような罵詈雑言を放つ男の腰に少年がつかみかかる。

「警察なら呼んでくれ！松木渚は泥棒！松木渚は泥棒！人魚を返せ！」

「寝言は寝て言え。あそこのお嬢さんはそんなことしない！」

いくら民家が少ないとはいえ、坂を一つ越えれば団地がある。近くにいくつもある工場には夜間

勤務者もいる。騒ぎに人が集まってくると男もきまりが悪くなったのか、隣家の親子をふりほどいて車に戻り、乱暴に発進して行った。ベランダに立ち尽くしていた美波は慌てて下に降り、玄関を開ける。

「あの…ありがとうございます」

それから周りにばらばらと集まった傘をさした人々に気がつき

「ご迷惑をおかけしました」

と頭を下げる。傘をさした人々は珍しいものを見るようにしてから去っていく。風で目の前の中年男性の髪の毛がそよぎ、頭皮が見えた。

「女性一人でこんな暗いところに住んでるから、何かあったら助けてあげましようって家内とも話していたんですよ」

美波は返す言葉が見つからず、ただ何度も頭を下げる。

父親の背後で雨にびしょ濡れになったまま空中に蹴りを入れていた少年が寄ってきて

「今は一人じゃないでしょ」

と、思いのほか低い声で言う。背丈の成長に対して声変わりは早いらしい。

「あの、姪と」

「もう一人いるでしょ、ガイジンみたいな女の人」

そう言うと、少年はすぐに後ろを向いて正拳突き你真似を始めた。

隣家は白井という名前だったと美波は思い出す。

「あの」

美波がまた言葉が羽虫のように飛び交ってうまくつかめないでいると、いつの間に来たのか、渚が「あの子は私の友達で、事情があつてここにいてもらってるんです、体が悪くて」と答えた。

白井氏は渚の態度に何か察したのか

「まあ、お隣ですから。おじいさんにはお世話になったし、頼ってください」

と会釈をして息子と一緒に帰って行った。美波は「ありがとうございました、ありがとうございます、ありがとうございます」

ました」と繰り返し頭を下げた。



深夜二時を回る頃、台風が上陸した。雨戸が音を立てて揺れた。

お風呂から上がった美波は、キッチンで紅茶を入れていた渚の向かいに座る。人魚はずいぶんエネルギーを消耗したのだろう、色を失ったままぐったりと横になっている。溶けてしまうことを危惧したのか、人魚の下には渚が敷いたブルーシートがあった。細く小さく電気が動いているのが見えるので、まだ生きているのだと美波は安心する。

しばらく黙って二人で紅茶を飲んでいたが、美波がふと思いついたように

「この前、秀介くんから電話あったよ」

と言った途端、渚は泣き崩れた。

そこからの話は大体こうだった。

三年前、祖父の葬式と流産で結納が中止になったあと、秀介は転職した。家庭を持つために収入

を上げたいと言っていたが、結果的に二人の休みは合わなくなり、すれ違いが増えた。落ち着いたらやり直すことになっていた結納は延び続ける。もともと口数の少ない秀介だったが、さらに話す機会が減り、いつしか渚は猜疑心と焦燥でいっぱいになっていた。思いつめて婚活パーティーに参加し、そこで森岡と知り合った。

快活で社交的で博識な森岡は、何もかもが秀介とは違っていた。渚の容姿をよく褒め、流行の映画もお店もよく知っている。携帯電話には頻繁にメッセージが入っているようだった。秀介のことも正直に話したが、森岡は「ぼくを選んでくれるまで待つよ」と言ってくれた。婚活マニュアル通りにランチデートを数回重ね、覚悟を決めて夜のドライブの誘いに乗った。車はスカイラインから展望台に止まる。「この後、ぼくの家でお酒を飲まないか」という誘いに渚は頷いた。展望台からまたスカイラインに乗り、海岸沿いを走った。波が高い。ラジオが台風の接近を知らせている。少しビーチに出ようと提案されて車を降りると、手をつないで浜辺を歩いた。渚は昂揚した。

「秀介とは、あんな風を手をつなぐとか、腕を組むとか、赤ちゃんがだめになってからずっとなか

ったから」

声を詰まらせながら渚は明かした。

砂浜で遊んでいると、ひとときわ高い波が押し寄せる。波が引いた砂の上には、ぷるぷるとした光る魚が残っていた。

「大きい」

渚と森岡は魚にかけよった。近海で揚がる魚としてはあまりに大きい。渚ほどの大きさがある。

森岡はジャケットのポケットから携帯電話を出すと、照明代わりに照らした。白い目がぎよろりと開いた。よく見ると、大きな頭は人間のそれによく似ている。腹ビレと背びれは厚みがあり、手のようにも見え、腫ぼったい尾びれが足のように見える。

「背中が丸くて、横向きになっていて、手が短くて、足がしっかり分かれてなくて、七週目くらいの、お腹の中の赤ちゃんみたいなの」

美波は膝の上で拳を固めて聞いた。

森岡は落ちていた枝で魚をつついた。魚は苦しそうにする。何も言わずに森岡は車に行くと、大きなブルーシートを持って戻った。

「渚ちゃん、これはね、人魚だよ。生きた人魚だ」

後部座席に魚を包んだブルーシートを乗せて、森岡は車を走らせる。

「人魚のミイラを見たことあるかい？真偽はともあれ、だいたい未熟児かできそこないの人間を魚にしたような容貌をしている。あれは人魚だよ。生きた人魚を捕まえたのは、現代ではぼくたちくらいだぞ」

三十分ほどして森岡の家に着いた。マンションの一階部分にあたるらしく、森岡はフェンス越しに魚を庭に投げ入れた。森岡は興奮したまま渚の肩を抱く。戸惑いながらも、まだ「夜のドライブデート」のつもりでいた渚は、庭からブルーシートを引き揚げて、ようやく、思っていた「恋人と初めてのお泊まり」と違うものになっていることに気がつく。ブルーシートを広げると、寒天のような触感の生き物の白い目が渚のほうを向いた。

(これは、私の赤ちゃんだ)

瞬間的にそう思った。エコー写真にうつってた赤ちゃん。口が出来て目が出来て手が生えて足も生えたのに。心臓だって動いていたのに。人間になろうとしていたのに。

森岡は夢中になってデジタルカメラで魚の写真を撮り始めた。渚はその間に家を飛び出す。タクシーを拾って秀介と暮らすマンションに戻ったが、秀介はまだ帰っていない。化粧も落とさずに眠ってしまった、翌朝目覚めると、丁度秀介が出て行ったところだった。低気圧のせいか、ひどく頭が重い。台風が近づいているというのに、あなたの恋人は浮気中だというのに、それでも何も言わないのかと憂鬱になった。憂鬱な気分のままインスタントの袋ラーメンを茹でていると、森岡からメッセージが入る。

「昨夜はごめん。珍しいモノに目がなくて。今夜また来てね」

渚の脳裏に庭にブルーシートごと魚を投げ入れた森岡が蘇る。反射的に返信を送った。

「ごめんなさい。今日は都合が悪くて行けません」

もう会わない、とは言えなかった。もう会わない、と言い切るには、昨夜の出来事はあまりに現実離れしていたし、秀介は素っ気なかった。

台風は夕方に接近するとテレビが言っていた。

渚は半日以上を横になって過ごした。

夕方になると秀介からメッセージが入る。

「施主様の代理で現場に行ったけど、電車が動かなくなりました。帰れないかもしれません。戸締まりに気をつけて」

いつも通りの、よそよそしい文章だ。出会って何年経っても敬語で文章を打ってくれるのは、お互いを尊重しているからだと思っていた。だが、今はもう、心の距離感にしか思えなかった。渚は車を出して、森岡の家を目指した――

「そうしたら、全然知らない若い女の子が裸で森岡さんといって、まーちゃんがその女の子と同じ顔と体になって、私、無我夢中で」

その後のことは、美波もだいたい知っていた。

美波は冷蔵庫から缶ビールを一本出すと、渚に渡した。渚は一気に飲み干すと嗚咽してそのまま眠りに落ちる。自分が座っていた椅子を渚の隣に置き、ややぼっちゃりとしている姪をなんとか横に寝かせると、先ほどまで人魚を包んでいたタオルケットをかけた。

台風はいつしか過ぎ去っていた。





翌朝、美波はスーパーのサービスカウンターで菓子折りを買ってから、一人で白井家を訪ねた。渚はまだ色を戻さず眠り続ける人魚のそばを離れなかった。乞われるように客間にあがり、美波はソファに掛ける。

「白井家へようこそ。うすい、毛、という、自己紹介なんですが」

昨夜よりもふっくらして見える主人は、寂しい頭皮に手を当てる。

「つまらないでしょう。いいんですよ笑わなくて。いつものことなの」

白髪まじりの豊かな髪を短く揃えた婦人が麦茶をグラスに注ぎながら笑った。

美波はつまらないわけではなかったが、緊張してうまく笑えなかった。

白井夫婦は他愛のない話をしたあとで

「実はね、うちの草太。前の小学校でいじめられていたの」と切り出した。

「学校に行けなくなっちゃったの。先生とも何度も話し合いをしたし、クラスの子たちの親御さんとも歩み寄ろうとしたのね。でもだめだった。歩み寄ろうとすればするほど余計に悪くなる子たちというのはいてね」

「あの子たちはね、影でこそこそ、先生たちに見つからないように草太を呼び出すんですよ」  
婦人の話をさえぎって主人が話し始めた。毛の少ない頭頂も真っ赤にして怒っている。

「幸い、この人の勤め先が新規事業所立ち上げというので希望者を募っていたから、転校ってことにしてね」

一人が話せばもう一人が話を続ける。美波は自分より若いこの二人が戦ってきたものの大きさを考えた。

「だから、こう言っちゃなんですけど、おたくのおじいさんから水野さんのお話聞いたとき、すごく安心したんです」

「そうそう。なんだ、学校行かなくても健康そうだし社会性あるじゃないって、その晩主人とワイ

ン一本空けちゃった」

「社会性、ですか」

「目が合えば会釈してくださるし、お姉さんと仲良くしていらっしやるし、おじいさ：お父様ともお話していらっしやるようだったし」

美波は目頭が熱くなるのを感じた。それらはすべて家の中での出来事で、外の誰かが見ているだとか、父が外で誰かに話しているだとかは考えたことがなかった。

「結局あいつには転校がよかったみたいで、中学校もなんだかんだ部活なんて行きたくないとか、試合なんて出たくないとか言いながら、なあ」

「通ってるんですよ。あ：」

不意に思い出したように白井婦人は身を正すと

「どうも、うちの子、おたくの畑を通過して学校行ってるみたいで：申し訳ありません」

深々と頭を下げるので、美波は面食らって立ち上がる。

「いえ、いえ、いえ、その」

また言葉が羽虫のように飛び交った。それらを一つずつ捕まえるように、目を宙に泳がせながら美波は言葉を発する。

「：使っていいです。畑は、ずっとやっています。姉が、宅地転用とか、考えているみたいです  
が、まだ保留で、だから、あそこは使っていいです」

もとより隣家の娘を悪く思っていなかった白井夫婦は、そのたどたどしさを好感で迎えたようだった。

「じゃあ、何か困ったことあったら、いつでも頼ってくださいね。お隣ですもの」

結局、その日は昼まで白井家で過ごした。お昼に姪御さんと呼んで是非一緒に、と誘われたところを躊躇っていると、すぐに取り下げる。

「事情がおりでしょうから。もしお話できるようになったらいつでも、コレと一緒にお話しましょう」

白井氏はビールを飲む仕草をしてみせる。婦人が「うちは日本酒もワインもビールもいつでもありますから」と酒豪ぶりを覗かせた。何度も頭を下げながら白井家をあとにし、美波は不思議な昂揚で家に戻った。

玄関を開けると醤油の香ばしさが漂った。渚の「おかえりー」という声が聞こえてから、ぱたぱたと軽やかな足音が聞こえて、高く響くような耳鳴りがする。すっかり色を戻した人魚が、日元をほころばせて、顎を四回動かす。その動きが意味するところは美波にもすぐにわかった。

「お」「か」「え」「り」

一週間と空けずに森岡がやってきた。昼間で、渚は当然仕事だった。今度は映像で見た若い女も一緒だった。インターホンを押す良識は残しているようだが、モニター越しに見える森岡の顔は前回よりもずいぶん鬼気迫っていた。

「人魚を出せ、人魚を出せ」

隣家は共働きで、昼間は誰もいない。美波は警察に電話をすると、また赤く光りだした人魚を寝室のベッドに寝かせ、布団をかぶせた。寝室のカーテン越しに、そっと外を覗き見る。車の中から女が出てくる。女は森岡を呼び止めるように甲高い声をあげる。

「きいくん、もういいじゃん、人魚なんて。帰ろ」

「人魚を出せ、人魚の、」

それから後は耳をふさがずにはいられない言葉ばかりが並んだ。女が懇願する声が聞こえるが、

それも品のあるものではなかった。美波は人魚に寄り添うようにベッドに腰掛ける。そっと布団から手が伸びて、赤くなったり白くなったりを繰り返す指先が、美波の背中に触れる。小さく電気が走る。美波は背中に手をまわすと、その手をそっと握った。包み込むように電気が弾けるのを感じる。手のひらがあたたかい。この刺激が、男をあんなに狂わせるのだろうか。美波は考える。そして、生まれてこなかった赤ん坊を重ねて人魚に執心する渚のことを思う。

結果的に人魚が感謝をしているには見えるが、渚が強引に森岡から人魚を奪ったことは事実だった。

「まーちゃん」

手のひらにまた微弱な電流が流れる。

「私たち、お別れしないといけないかもね」

透明な弾力のある手は、美波の乾いた手をぎゅっと握った。しばらくしてパトカーのサイレンが聞こえてきた。インターホンで警察官の青年に呼ばれて玄関を開けると、森岡が走りだす。それを

体で止めようとして、美波は森岡を抱える形で転倒をした。背中を強かに打つ。青年があわてて森岡を捕える。なんとか立ち上がった美波は、警察と森岡を押すように外に出る。

「こちらは水野さんのお知り合いですか？」

痛みをこらえながら美波はかぶりを横に振る。

「渚、姪の知り合いだそうですね、先週も姪を侮辱するようなことを怒鳴りに来ました」

美波はずっと考えていた言葉を出す。あらかじめ考えておけば羽虫に惑わされずにしゃべることが出来る。警察はメモを走らせると、腕で押さえつけている森岡にも一応声をかける。

「あなたの名前は」

「人魚はどこだ」

パトカーに驚いて車に戻っていた女が、助手席の窓から身を乗り出して

「おまわりさん、もうだめだよその人。頭おかしくなっちゃったの」

とため息をついた。警察は念のためという感じで



「人魚というのは」

と美波に尋ねる。これも美波は考えていた。

「姪の知り合いです」

森岡さんに乱暴されているところを助け出したって聞いてます、と続ける予定だったが、車の中から女が口を挟む。

「ほんと、おかしいの、その人。人魚を食べないと死ぬって言ってて」

警察はしばらく話を聞いていたが、女が「私がちゃんと見張ってるから大丈夫」と森岡を乗せてその場を去っていくのを見届けると、何度も首を傾げた。

「水野さん、もう一度聞きますが、人魚というのは」

「姪の知り合いです。森岡さんに乱暴されているところを助け出したって聞いてます」

セリフを確かめるようにゆっくりと喋った。青年はようやく合点がいった、という表情でメモを取る。

「女性だけの世帯ですし、暗いので気をつけてください。我々もこのあたりを重点的にパトロールしていきます」

美波は深く頭を下げると、パトカーが帰っていくのを見送った。家に入るとどっと疲れが出て、急激にさきほど打った背中が痛み出した。それでも、自力で対応できたという達成感があった。昨今のつきまとい事件でナイーブになっているせいもあるだろうが、警察が親切にしてくれたことも嬉しかった。美波は寝室に行くと、赤くなったり戻ったりをまだ繰り返している人魚の隣に横たわった。指先と足先が人魚に触れて、ビリリ、と痺れる。背中がズキズキと痛んだ。若くないので背中を痛めるのは今後困るなあと考えて、背中をさすっているうちに、眠ってしまった。

目覚めると朝だった。隣にいた人魚はいない。慌てて飛び起きて、体が軽くなっていることに驚いた。ひよっとして人魚の電気に低周波療法のような効果があったんだろうかと考えながらお勝手へ行く。渚と人魚はもう朝食を済ませていた。

「おばちゃんおはよ」

人魚の顎も三回動く。美波が「おはよ」と椅子に腰掛けると、渚が野菜をジュースに放り込んでから「昨日森岡さん来たんだって？」とにやにやしながら聞いた。誰から聞いたのか、と考えながらも渚は頷く。「様子がおかしかったから、警察に来てもらったよ」

渚は野菜ジュースをグラスに分けて注いでから、手元に置いてあるスケッチブックを広げる。そこには人魚の筆跡がある。

「もりおか

さくら

みなみ」

スケッチブックは三枚続く。

「もりおか

さくら

みなみ

けさつ」

「みなみ

けさつ」

「みなみ

まーちゃん

おやすみ」

スケッチブックを閉じると、目を輝かせて渚は人魚を抱きしめる。美波は、一枚の紙に書く人間の名前を変化させることで出来事を推察させた人魚の工夫にも驚いたが、一方で「人魚はその場になかったのにな」と違和感を覚えた。ご機嫌で出勤した渚を見送った後、目をチカチカ光らせながら新聞を読みふける人魚に美波は呟く。

「まーちゃん。あなたは何者なの」

その晩、人魚は蒸しタオルで体を拭いて寝間着に着替えると、美波と渚を二階の収納部屋に手招きした。収納部屋の遮光カーテンを締めると、額をカリカリと搔いて、ボロリと落ちた欠片を手に取り。額の穴に蒸しタオルを当てると穴は消えている。人魚は欠片をカーテンに向けて光を投射し、脇に抱えたスケッチブックに、人魚は文字を書く。

「まーちゃん いえ」

カーテンには暗い影がうごめく。やがて画面が深い紺になっていく。そこに虹色の光が無数に走る。

「まーちゃん じ」

その走るような虹色が人魚の文字なのだ、渚はすぐに理解した。耳鳴りが聞こえ始める。画面には、渚が最初に見たという、発生して間もない胎児のような姿をした「人魚」たちがたくさん映

し出される。彼らは尾びれを動かして泳ぐ者もあれば、尾びれを足のようにして地面につけている者もある。どうやら海の中らしい。ごつごつとした岩や、地面から噴出する気泡が映し出される。

「まーちゃん しごと」

岩がクローズアップされ、よく見れば、規則的にある割れ目には仕切が設けられている。そこを、まるで巣穴を出入りする蜜蜂のように「人魚」たちが蠢く。その短い腕には、棒切れや、貝殻や石や板が携えられ、彼らは道具を使う生物なのだと推察された。

また虹色が走る。

「まーちゃん むかしむかし」

続く映像は地球形成の歴史に似ていた。こうした映像と、時折現れる走る虹色と、人魚がスケッチブックに書く文字を対応させてゆけば、どうやら今渚たちが見ているのは「人魚文明紹介ビデオ」のようなものらしかった。

——後年、渚と改めて話をまとめてみたところ、彼らが人魚についてわかったのは次のようなこ

とだった。

- ・まーちゃんの故郷はどこかの海底にある（見たことのない生き物が多かったので、多分深海だ）
- ・発光と音波でコミュニケーションしている（これは何となくわかっていた）。
- ・身体の一部を切り離して海に溶かすことで、遠くの相手ともコミュニケーションが取れる（インターネットや電話のようなものか）。

- ・卵から発生し、おたまじゃくしに似た幼体期から胎児に似た成体期を経て、やがて溶けて消える。

- ・まーちゃんは、研究者か冒険家のような仕事をしていて、未知の文化を調べている。

- ・まーちゃんの仲間たちは、上陸に失敗して溶けてしまった。

- ・まーちゃんは、調査報告のために、海に戻らねばならない。

人魚は二時間に及ぶ映像の最後にスケッチブックに文字を書く。

「まーちゃん

なぎさ

みなみ

くるま」

それから、いつの間に覚えたのか、頭を深く下げた。





翌朝、渚が出勤すると、隣のデスクで先輩がノートパソコンを広げている。

一晩中泣いたせいで、渚の目の下はアイメイクが意味をなくすほど腫れていたし、声は枯れていた。

「おはようございます」

「おはよ。松木ちゃんどうしたの声」

「すみません」

デスクトップパソコンの電源を入れて、席に着く。先輩は腕時計を眺めて、手早く入力を終わると、資料を印刷し始めた。ノートパソコンをたたむと出かける準備を終えて立ち上がる。渚はデスクに積みまれた書類に手をかけて、いつも通りのチェックから始める。三年前に赤ちゃんがお星様になった時も、出勤して仕事はできた。どんなに辛いことがあっても仕事はできるのだろう。

先輩は「辛かったら早退しなよ」と言い残して所長と駆け足で出て行った。先日からアプローチしている案件がついを取れそうなのだと言業所が沸いている。先輩は春の人事で昇進するだろうなと渚は思った。

その日は業務量が多く、渚はお昼の時間を削って仕事をした。

（おばちゃんはまーちゃんを海に連れて行くと言うだろう。でも車を出すのは私だ。おばちゃんは免許持っていないから）

だったら、海に連れて行かないこともできると渚は思う。理由をつけて海に連れて行かない。人魚にはずっと家にいてもらう。あんなに頭がいいのだから、そのうち言葉だって話すかもしれない。そうしたらお揃いのワンピースを着て映画を見に行くこともできるかもしれない。お料理だって一緒にできるかもしれない。私は勉強だって教えてあげられるのに。

（おばちゃんにはわかりっこない。赤ちゃんもできたことないおばちゃんには）

そう考えたとき、電話が鳴って我に返った。会社名を名乗り、用件をメモしているうちに頭のな

かが落ち着いていく。自分をかわいがってくれ、今も何も言わずに家に置いてくれている叔母に対して、何を考えたんだろうと罪悪感が湧き上がった。だがそのどす黒い感情は、高校に入った頃からずっとあるものだ。私はどんなに辛くても学校に行ったのにおばちゃんはやめてしまった。サークルになじめなくても大学に行ったけど、おばちゃんは家から出ない。私は毎日仕事に行っても誰からも褒められないのに、おばちゃんは一日四時間のアルバイトに週に二回行くだけで褒められる。

いつものように、営業所には誰もいなかったの、渚は泣いた。泣きながら仕事をした。誰か帰ってくるまでに化粧を直さないといけないなど思っていたが、結局その日は定時を過ぎても誰も帰ってこなかった。電話を留守番電話に切り替えて会社を出ていく。

営業所のメンバーが帰ってきたのはそれから一時間ほど経つてのことだった。

「松木ちゃん帰ったね」

先輩が言うと、所長が「具合悪そうだったもんなあ、賞味期限明日までだけど大丈夫か」と言いながら、渚の机に洋菓子屋の包みを置いた。別の男性社員が「彼氏となんかあったんじゃないの、

最近車で出勤してるし」と邪推し、先輩に叱られる。

「誰だって色々あるよ。そのうち元気になるよ。さて、今日の報告まとめていこ」

明日は本社出勤だから表情豊かな後輩がパウンドケーキを見て喜ぶ姿は見れないんだな、と彼女は少し残念に思った。

パソコンの前に座って三時間、美波はようやく、真砂にメールを送信した。いつもより長くなつた。

「いつもありがとう。渚から話が聞けたけど、まとまらなくて、遅くなりました。渚は秀介くんとすれ違が増えて、婚活パーティーに出たそうです。それをとても後悔していて、秀介くんに会うのが辛いそうです。でも、そのうち秀介くんと話すと言っていました。」

明日から二日間、仕事を休んで岬のキャンプ場でバーベキューをすることになりました。気分転換になるといいなと思っています。

松木さんにも、よろしくお伝えください。P.S.昨日、お隣の白井さんが畑の草を刈ってくれました。写真を添付します」

刈り取った草の山の前でポーズを取る白井家と美波の四人が写った画像を選択して添付した。渚

が撮ってくれたのだ。

人魚は渚に譲られた白いワンピースを着て、裾をふわふわ踊らせている。ボタンもかけられるようになっていたが、簡単に脱ぎ着できるワンピースが気に入っているようだった。

渚が人魚を海に連れて行くことに同意したのは、三たびの森岡の来訪が理由だった。土曜日、美波がアルバイトに行っている間に森岡はやってきた。すぐに白井家の息子がテニスラケットを持って現れて事なきをえたが、日増しに人間らしさを失っていく森岡に衝撃を受けた。諦めたような表情で森岡を車に乗せてきた女が、しばらく森岡が騒ぐのを見届けるとまた車に乗せて帰っていく。森岡の罵声はもはや言葉にもなっていないなかった。にんぎょ、という単語すら曖昧だ。母音以外が発音できなくなっているようだった。その翌日には女だけがやってきた。女は以前会った時よりも、色が白くなり、あどけなさが消えて艶やかになっていた。

「はじめまして、じゃないか。桜っていいいます」

家の前じゃなんだし、と言うので、渚は一人で桜の車に乗り込んだ。桜は慣れた手つきで車を走

らせる。

「きいくんが騒ぐから、よくこの辺きてるんですよ」

信号待ちで道路脇の看板を指差す。

「あのホテル、よくきいくんを連れてくんです。最初のうちは、そういう目的だったんだけど。最近はおとなしくさせるため」

仕事も辞めちゃったっていうか、無断欠勤が続いてクビになるんじゃないかな、こないだ人事課から書類来てたし、と言ってアクセルを踏む。見慣れた景色が続く。山、工場、工場、スーパー、電気屋、自動車屋、釣り道具の店、チェーンのハンバーガー屋、工場、工場、ビル、山、工場。

「今日はね、『人魚の体液だよ』って嘘ついて、睡眠薬溶かしたウオツカ飲ませて出てきちやった。生きてるかな」

しばらく走らせて、喫茶店の駐車場に車を入れる。休日だけあって駐車場に車が多いが、中を覗くと席は少し余っている。イギリス式の庭がある喫茶店だ。遅くまで開いているので、渚も仕事帰



りに寄ることがあった。

落ち着いた雰囲気店の店員が水とメニューをテーブルに置く。美波と同じ年頃に見えた。

「私、出会いサイトできいくんと知り合ったんですよ。渚さんは？」

「：婚活パーティー」

「そうなんだ。騙されましたよねー、お互い。私、絶対きいくんは私だけだって思ってたもん。あの日は何で乗り込んできたんですか？」

「あの日は、森岡さんに呼ばれて最初は断ったけど、考えが変わったの。乗り込んだつもりなんてなかった」

「あー渚さんに断られたから私にきたってことか。なんだ。私バイトしてたんだけど、急にメールきたから早退してタクシー拾って行っちゃいましたよ。私、今の今まで、私の方が本命で渚さんがキープだと思ってた、なんだ、なーんだ、ばかみたい」

桜は背中を反らせて空に向かってため息を吐いた。服の上からも形のわかる豊かな胸が上下した。

コーヒーを飲みながら話をしていると、離れた席で本を読んでいた若い男が近づいてきて、桜にそつと紙切れを渡して戻る。紙には電話番号が書いてある。

「またかあ。最近多いんですよ。急にもててるっていうか…私、前にきいくんの家で会った時より美人になったと思いませんか？」

「…前にお会いした時も、若くて可愛いと思ったけど」

その言葉に毒を含んでいる気がして、渚はすぐに恥ずかしく思った。

「私、絶対ブスだったと思うんですよ。出会いサイト以外で、彼氏できたことないし。

でも、あの人魚の肉を食べたというか、きいくんの体についてた欠片を食べたっていうか…あの日からだと思うんですよ。ずっと吹き出物とそばかすに悩んでたんですけど、全部なくなっただし。痩せたのに、胸のカップはあがったし。知らない男の人から、今みたいに突然誘われたりするし。渚さんも食べてみたほうがいいよ」

桜の言い分は、つまり、もし渚が人魚の肉を手に入れたら自分にも分けて欲しいということだっ

た。それを懇願する目つきは玄関の前で騒いでいた森岡に似ていて、渚はタクシーを呼ぶと、千円札を二枚テーブルに置いて家に帰った。

家では美波と人魚がDVDを見ていた。渚は突然人魚を抱きしめる。微弱な電気がぱちぱちと渚の体を通り抜けていった。

「まーちゃん、映画館に行こう」

美波は戸惑った顔をする。

「お買い物して、服を買おう」

小鳥のさえずりのような耳鳴りが聞こえる。

「キャンプに行つて、バーベキューをしよう。夜は海で星を見ようね。星座を教えるから」

渚の声は震えていた。

「星座のことも、海の人みんなに教えてあげてね」

その朝はよく晴れた。人魚が車の後部座席に乗った時、眠そうな顔でブロック塀を越えた草太少年が立ち止まった。人魚は窓から顔を出して、手のひらをひらひら動かした。草太は早足で車の前にやってくると、助手席に入ろうとした美波に「おばさん、あの変な男はもう大丈夫ですか、僕、ついていかなくていいですか」と顔を真っ赤にして声を張り上げる。渚は苦笑する。美波は「ありがとう」と言ってから、少し言葉を考えた。

「ありがとう。このひとが、ようやく家に帰れることになりました。あの男の人たちは、もう来ないと思うよ」

「どこに帰るの」

「遠い海の向こう」

目指す海はそんなに遠くなかったが、人魚が行くのはずっと遠いところだった。

「ハワイ？フランス？アメリカ？」

少年にとって遠い海の向こうはハワイとフランスとアメリカだった。

「そうだね。ハワイ。おばちゃんとお姉ちゃん、一緒に遊んでから空港まで送って行きます。まーちゃん、挨拶して」

人魚は美波に促され、窓から顔を出したまま顎を五回動かす。「あ」「り」「が」「と」「う」。耳鳴りを覚えたのか、草太は頭を押さえた。それからまた人魚が顎を五回動かす。少年はその形を模倣するように、声に出す。

「…さようなら」

少年は口をへの字に曲げて、カバンの中から個包装の飴を取り出し、車の中に放り投げた。そのまま無言で走り出す。人魚は飴の包みを開けて、口の中に入れる。お菓子の袋も、人魚は開けられるようになっていた。

渚が無口に車を発進させる。

まずはショッピングモールに行く予定になっていた。高速に乗ってすぐに降りると、十年ほど前にできた大型ショッピングモールがある。映画館も併設された、近年増えている施設だった。

人魚はどのショップでも店員に気に入られ、あれもこれもと試着を勧められた。渚は自分も気に入った服と一緒に買うと、すぐに着替えて、美波に写真を撮るように頼んだ。美波は渚と人魚がショッピングモールで買い物する姿をデジタルカメラで何枚も撮った。フードコートで同じドリンクを飲む姿も撮った。アクセサリーを買った後にも写真を撮っていたら、ピンクに髪の毛を染めた店員が「お母さんも一緒にどうぞ」と三人の写真を撮ってくれた。

「やっぱり、お母さんに見えるよね」

渚が少し笑った。

「中学校の頃、私、学校で嫌なことがあるたびにおばちゃんの家に来てたでしょ。帰るとママが『あなたのママは誰なのよ』ってよくぼやいてた」

美波は何も言わずに頷いた。姉が自分に向ける優しさが、複雑さを伴っていることは知っていた。

「ママはママで、おばちゃんはおばちゃんなのにね」

そう言って、渚は胸の奥が痛む気がした。ママはママで、おばちゃんはおばちゃん、赤ちゃんは赤ちゃんで、人魚は人魚なのだ。

映画はアクションを選んだ。平日の昼間のせいか人はまばらだったが、あの中の何人かは車が大破したり俳優が高層ビルから落ちるたびに耳鳴りが起きることを不思議に思っていただろう。

お昼過ぎには車を出して、海岸沿いを走ってキャンプ場に向かう。人魚は後部座席で、流れる景色に夢中になっていた。瞳も髪の毛もチカチカと点滅をする。時折繁る木々が緑の影をつくり、その合間合間に高い日差しに白く照り返す海が続いた。光の加減か砂浜も白く見える。

キャンプ場に着くと、渚が管理棟で手続きをする。テントが常設してあるファミリー向け施設で、美波は人魚と少しずつ荷物をテントに運び入れた。シーズンを外した平日とあってか、今日の利用者は美波たちだけだという。美波は安堵した。

少し休んでから二キロほどのウォーキングコースに入る。ショッピングモールで歩き疲れていた

人魚が途中で透明になりかけたので、芝の上にレジャーシートを敷いて寝転んだ。澄んだ空に鳥が舞った。冷たい風が秋の訪いを知らせ、黄色い小さな葉を落とす。耳元で虫の羽音がする。美波が人魚と一緒に休んでいる間にも、渚は水筒のお茶を三つのグラスに分け、シヨツピングモーで買ったマシユマロを紙皿に乗せる。人魚は初めてのマシユマロを頬を瞬かせながら味わった。

日が傾きかけてから調理を始める。管理棟でカット済みの食材を受け取った。渚は大きくカットされたしいたけを人魚に渡し、そばについて包丁の持ちかたを教えると、三つのしいたけを六つに分けさせた。人魚は指先をチカチカさせながらも器用に切り分けた。渚は手をたたいて喜び、しいたけを焼く間にも、「これはまーちゃんが切ったしいたけ、これはまーちゃんが切ったしいたけ」と褒め続けた。あまり食べられない人魚と、もともと食の細い美波だったので、少し廃棄にしまったが、渚は満たされていた。この時間がずっと続いたらいい、と思った。

キャンプ場からビーチまでは、徒歩五分ほどだった。

歩きながら、渚は空を指す。



「アンドロメダ。カシオペヤ。ペガサス。北極星」

夜空を写したように人魚の瞳はきらめきつづける。

「北極星は、いつでも出ている星だから」

渚は声を詰まらせた。

「私は、北極星を見るたびにまーちゃんのことを思い出すね」

砂浜に出ると、渚はうずくまって泣きじゃくり始める。人魚もその隣にしゃがみこんで、渚の背中に触れた。美波もその隣にしゃがみこむ。これから人魚が入っていくのだろう海をじっと見た。

昼間は白かった海が、黒かった。

(こんな怖いところへ、一人で入ってゆくのか)

そっと人魚の指に触れる。人魚は美波を見ると、とてもゆっくりと「あ」「り」「が」「と」「う」と言った。それは本当に微かな、まるで細い糸が風に震えるほどに微かな声だったが、確かに声だった。渚も驚いて顔を上げた。

人魚は立ち上がった。少しづつ色が抜けてゆく。ワンピースと下着を脱ぐ。人魚の体は青白く光っている。

と、遠くから車とサイレンの音が近づいてきて、止まった。大きな声が聞こえたかと思うと、砂浜を男が走り込んでくる。森岡だ。その後ろから追いかけるのは、桜と二人の警察官だった。

「待ちなさい、止まりなさい」

森岡は呻くようにして走ってくる。着ているものが先日と変わっておらず、だいぶ汚れている。

渚は人魚の前に立ちはだかった。警察官が二人がかりで森岡を捕まえるが、森岡は言葉にならないことを喚き散らして暴れる。二人のうち年配の男が、服を着ないで海に向かってゆく人魚を見とめ「あつ、きみ、ばかな考えはよしなさい」

と手を伸ばした。途端、森岡は男の腕に噛みついた。叫び声をあげて男は森岡から手を離す。森岡は口から小さな肉片を吐き出す。連れの若い男が腰を抜かして倒れた。

後ろから遅れてきた桜が

「だからあ、その人もうバケモノなんだってばあ」

と息を切らしつつしゃがみこんだ。

人魚は少しずつ海に近づいていく。人魚の前に立ちはだかる渚に森岡が突進してくる。

「渚」

美波はとっさに渚を抱き寄せて浜に押し倒した。森岡が人魚の腕を掴む。人魚の腕は柔らかくちぎれ、手首から先だけが渚の顔の横に飛んできて、どろりと溶ける。

「人魚の肉」

しゃがみこんでいた桜が立ち上がり、渚のそばに駆け寄る。

森岡は何度も人魚をつかもうとするが、すべてちぎれてしまう。人魚がちぎれるたびに桜は右往左往して「人魚の肉、人魚の肉」と駆け寄っていく。波が高くなる。

「まーちゃん」

渚が叫んで立ち上がろうとするのを、美波はおさえつけた。

次の瞬間波が桜と美波に襲い掛かり、引いた時には、人魚も、森岡も、いなくなっていた。

その代わり、白い光沢のある小さな石が散在している。

「真珠だあ。人魚の肉が真珠になったあ」

桜は黄色い声をあげて、拾い集める。拾ったものをうっとり眺めた後、それを口に入れる。美波は渚の手もその白い石に伸びようとしたのを止めた。

美波は子供を抱きかかえるように渚を抱きしめる。

白い石を口いっぱい含んだ桜は、髪の毛が伸び、まつげが長くなる。背も少し伸びて、胸と尻がふくらみ、足首がまた細くなった。

「すごい、私、これでずっと、び」

美人、と言おうとしたのか、美女と言おうとしたのか。桜の声は突然途切れた。喉に手をあてのたうちまわる。

腰を抜かしていた青年が、それでも職務を全うしようとして這いつくばりながら「きみ、大丈夫

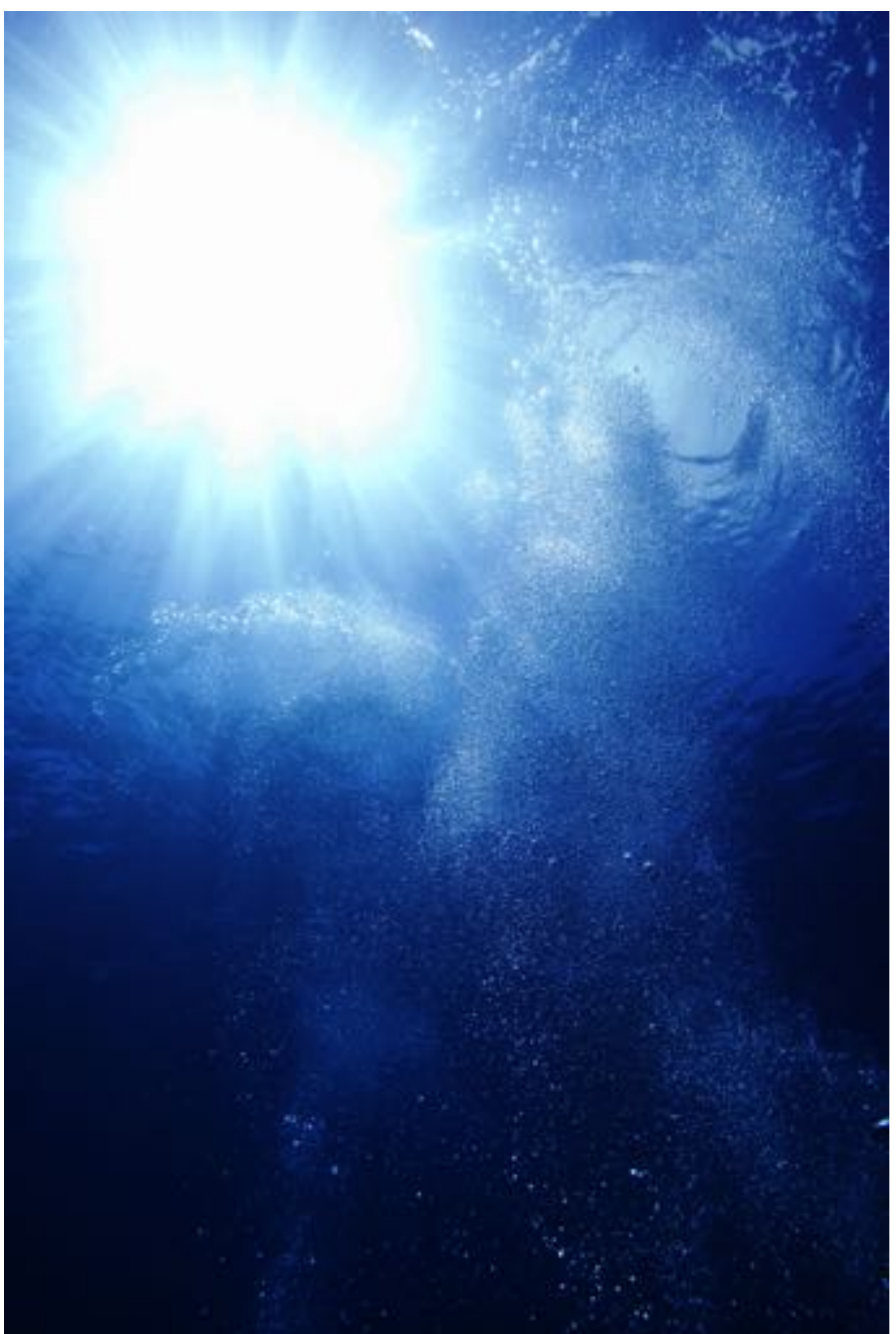
か」と桜に近づく。桜は青年にすがりつく。彼は桜の口の中を覗いてぎよつとした。

「どうした、この喉」

確認を手伝って欲しい、と手招きされて、美波は放心している渚の手を引き、桜の口を覗いた。

桜の舌はまるで梅干しのように乾燥して小さくなっており、喉の奥は焼かれたように真っ黒にただれている。だが肌はますます白く輝き、大きな目から粒の涙がこぼれていくのも艶めかしい。美波は砂浜に残っていた白い石を拾うと、すべて海に投げ入れた。桜がそれを取ろうと海に入ろうとするのを警察官は抱きとめる。

黒い波が、寄せて返し、寄せて返し、白い石はもうどこにあるのかわからなくなった。



渚は帰ってきてからも気丈に仕事に出て行く。美波は熱が出てアルバイトを休んでしまった。

人魚のいない生活は、美波を暗い気持ちにさせた。それは渚も同じに違いなかった。人魚のために用意した服や、人魚が残したスケッチブックはすべて納戸に押し込んだ。

週末に秀介から電話が入った。渚が対応し、来週話し合おうということと言っていた。美波は、姪はきつと家を出ていくだろうと感じていた。少しずつ、渚の身边も整理し始める。

やがて次の週末になり、秀介と渚は二人で喫茶店に行き、二人で目を腫らして帰ってくる。秀介は一人で出て行き、入れ違うように真砂と松木がやってくる。夜が更けるまで三人で話し続けた。美波は所在なく、ガレージの整理を始める。父が気に入っていたガレージ。母とお茶を飲んだガレージ。初めて人魚に出会ったガレージ。古すぎる雑巾や、もう使わない車の整備道具。残すもの、残さないものを選び分けていく。ビー玉とおはじきが出てきて、人魚に教えてあげればよかつ

たなと思う。涙が溢れる。耳の近くに力を入れて頬を持ち上げる。人魚と一緒に笑顔を練習したことを思い出す。胸の奥があたたかく、潤ってくる気がした。

しばらくして、渚は荷物をまとめ始めた。次の週末にはまた秀介が玄関に訪れる。渚に寄り添いながら、荷物をガレージに移していく。

「秀介くん、今日も仕事休めたんだね」

美波がお茶を入れながら話しかけると、秀介は苦笑して「婚約者が家を出てしまったと言ったら、お客様に怒られました」と気まずそうに告白した。「お休みもらった分、しっかり働いていかなくちやね」と渚が歯を見せて笑う。美波には見えないところで、二人は関係を新しくしたようだった。そうして渚もいなくなった。

五十年前に山の中腹の畑を潰して建てた家は、また渚一人になった。けれど広い家を持って余すとはなくなった。白井婦人がたまに遊びに来るようになった。お茶とお菓子を手土産にすることもあれば、昼からビールを持ってくることもあった。美波が白井家を訪ねることもあったが、婦人に



は旦那と子供の前で言えない愚痴があるらしかった。草太少年が友達を連れて草刈りを終えた畑でテニスの練習を始める。美波はたまにガレージに少年たちを招いてお茶を出し、中学生の知人が増える。すると彼らの親が挨拶だと言っては訪れるようになり、来年の町内会は水野家のガレージでという話にもなる。何かと物入りになり、アルバイトを週に四回に増やしてもらった。

雪が溶ける前に式を済ませた渚には、秋が終わる頃、オギャアと泣いて色白の女の子がやってきた。

了

初出：ChildLike No.17

Photo by (c)Tomon.Yun <http://www.yunphoto.net>